

## 建築ジャーナル



2018年10月号  
No. 1271

風地をはじめ、死にかかある場所は、時間中、世代を超える永続性、人が訪れることで存在しえる場所性という意味で、どこか「建築」化している。建築家が死者と出会う場所を設計することは、自然なのかもしれない。お墓は死後に入る場所というだけではない。生者が死者と出会う場所でもある。さらに、故人の遺志を尊重する自然葬という考え方もある。

大切な人の死を思うとき、死を親密に感じるとき、死の先が探かぎ上がる。

## 〈特集〉

風地・坂本喜と知念寺共同墓

風の丘・坂本喜墓地

葬送の自由をすすめる会

秩父葬所・聖徳太子霊徳堂/秩父の墓 礼拝堂

静水川霊園礼拝堂・休憩棟

新宮霊魂光院直葬亭堂

山梨知彦

大宇根弘司

佐々木直人

水谷敬博

西宮コーゴウス

千代田区地対高砂緑園

聖徳太子霊徳堂

高知「定常のすゝめ」

三島霊園・慶川の危機

## 〈連載〉

五十嵐太郎

豊松統一郎

坂口恭平

宮本祥子

志野謙司

吉岡 保

松岡 祥

山崎 亮



坂口恭平

第八回

きになるばしょ むかしのかかん

建築家がデザインする  
死とかわる空間  
(礼拝堂・休憩棟)

## 「狭山湖畔霊園管理休憩棟／狭山の森 礼拝堂」 「猪名川霊園礼拝堂・休憩棟」



### 人種や宗教を問わない祈りの場

中村拓志とデイヴィッド・チップパーフィールド  
日英の建築家による無宗教の祈りの場。  
建て主に聞く、建築家と施工者との三位一体の協働、その思想

インタビュー……大澤秀行 | 墓園普及会 理事長

「建築をつくるにあたり、建て主として勉強しました。大きな費用を使うものですし、利用者に対して責任がありますから」。

そう話すのは、「狭山湖畔霊園管理休憩棟／狭山の森 礼拝堂」(2013年／2014年)と「猪名川霊園礼拝堂・休憩棟」(2017年)の建て主である墓園普及会の理事長、大澤秀行。前者は中村拓志&NAP建築設計事務所、後者はデイヴィッド・チップパーフィールドの設計による。世界中から見学者が訪れるこの美しい建築たちはどのようなように生まれたのか。その思想と協働について聞いた。

「財団40周年記念事業として、利用者のためになり、歴史に残るようなことをやりたいと考えたときに思いついたのが、財団と同じ年に出来た狭山湖畔霊園の施設の建て替えてでした」。

現代美術のコレクターでもある大澤は、四半世紀にわ

狭山の森 礼拝堂  
祈りの対象は普遍的な森。  
祭壇は森を背負って配置されている。  
床面には森に向かって下る緩い傾斜をつけ、稲井石の割り肌や目地が森の奥の消失点に伸びることで意識を森へいざなう。  
構造兼仕上げ材としての架構は、合掌造りの現代解釈。祈りの姿勢を促す

たるその経験から、いい建築をたくさん見ることが重要と考え、世界中のありとあらゆる建築を見に行った。話題に上っただけでも、アルヴァ・アアルト、ピーター・ズントー、ルイス・バラガン、フェリックス・キャンデラ、ル・コルビュジエ、ヘルツォーク&ド・ムロン、安藤忠雄、丹下健三、大谷幸夫…と語り尽くせないほどの建築を見た。

「素晴らしい建築の数々を見て感じたのは、私みたいな素人でも感動して打ち震えるのが本物で、理屈ではないということ。そして、それは建築も美術も同じだということでした」。

そんななか、メキシコで半日探して見つけたキャンデラによる小さなチャペルでの体験から大きな影響を受けた。

「中に入ったら涙がポロポロこぼれてきちゃって、理屈を超えてなにか見えないものに守られているような気がしてありがたかったんです」。

この体験から、人種も宗派も超えた平和な気持ちで



猪名川霊園礼拝堂  
宗派を問わない祈りの場として、最小限の暖房と照明しかない、無垢で静謐な空間。  
祭壇に向かって左右から緑を見せる「樹々の庭」の境界を感じさせないよう、透明度の高いガラスを使用。  
祭壇上部のスリットからは樹々の緑色を取り込んだ光が差し込む

設計条件は、設計者の創造性をつぶさないようにたったひとつだけにした。それは、「永遠に進化し続ける、エイジングに耐えうる建物であること」。これは「墓園」が永続性をもった場所であることにも起因する。コンペ

の勝者が礼拝堂を手掛ける権利を得るという条件にした。管理休憩棟を先につくることで、各種機能をうまく入れつつ美しく設計できる人を見極めようとしたからだ。

選定にはスタッフ全員が参加した。これが「建築を惹き、育てる」ことにつながっている。訪れた二つの霊園では、スタッフが建築の説明をしながら案内をしてくれて、「こんな傷あったかな」、などと話し合いながら建築を気遣う姿も数度見かけた。建て主側が、これだけの愛情をもって、施工方法まで説明できることには見学者もみな驚くという。

「利用者が誇りに思っで大事にしてくれることで地域の宝になる。そして、地域の宝が県の宝に、日本の宝になってそれが世界の宝になる。建築って人に愛されればこそ永遠性が出てくるものですね。建築は建ったときにゴールじゃない。スタッフみんなで、子どもを育てるように慈しんでいます」。

建て主が美術コレクターなのに、これらの建築には人間がつくった美術作品は置いていない。それは、ここにはすでに建築と偉大な芸術である自然が織りなす関係性があるからだと言う。狭山湖畔霊園の図録に記された大澤による「変化の連続こそ永遠である」という言葉には、変化しないことが永遠ではなくて、一瞬の変化が積み重なって永遠になるという意味がある。

なぜデイヴィッド・チップパーフィールドが設計を引き受けたのか

狭山湖畔霊園の施工中に、猪名川霊園の施設建て替え計画がスタートした。実は、猪名川霊園は大澤が初めて勤めた思い入れのある場所でもある。小さな管理事務所に一年間寝泊まりしていたという。なぜ、世界中で大プロジェクトが進行するイギリスの著名な建築家が日本のこの小規模なプロジェクトの設計を引き受けたのか？

「友人のトマス・シュトルトという写真家が、狭山のアイデア段階から賛同してくれていました。彼から、ぜひ自分の友人たちにも紹介したいから、思想と骨子を記したテキストブックを英語でつくってほしいと頼まれたんです」。

その友人の一人が、デイヴィッド・チップパーフィールドだった。トマスから、それを読んでデイヴィッドが感動して

共有する祈りの場をつくらうと決めた。こういった祈りの場は世界でも例がない。そして、アアルトの教会で記名帳を見て、毎日のように世界中から誰かが来ていることを知る。いい建築には、こうして人が訪れるだけの力があると確信したという。

40歳以下の若手建築家によるコンペ

特筆すべきは、狭山湖畔霊園管理休憩棟が40歳以下の若手建築家4組による指名コンペだということだ。要綱の作成から設計者の選定まで、墓園普及会が行った。

「コンペのやり方なんてわからないから、暗中模索です。勉強するために、建築学会の図書館を使いたくて会員になりました」とはにかむ。2010年当時に選出した4名は、勝者の中村拓志をはじめ、石上純也、永山祐子、平田晃久。その勉強量と先見の明に驚く。若手に限定した理由は、美術のコレクションを通じた体験にあった。

「ソーホーのまだ名の知れていない、食うや食わずやの作家を訪ねたり、そういう人たちと話をしたり食事をしていて、人生をシェアしているような感覚がありました」。

そのコミュニケーションが素晴らしいと感じ、プロジェクトはそこに携わる人が成長していくことが大事だと思ったと言う。

